書評・新刊紹介

横手裕著『道教の歴史』

山田　俊

横手裕著『道教の歴史』は、窪德忠『道教史』（山川出版社、一九七七年）以後、講座・シリーズものを除けば、本邦で刊行された一般向け道教通史としてはほぼ唯一の書籍であろう。本著は以下の内容から構成されている。

序章　中國の歴史と道教
第1章　道教の起源　先秦～後漢
第2章　信仰と諸經典の形成　後漢～六朝末
第3章　統合と成熟　六朝末～五代
第4章　變容と新たな歩み　宋遼金元
第5章　傳統の繼承と多様化　明～清
第6章　近代化の混亂と再出發　中華民國～現在
付錄：用語解說・年中行事・建築解說・年表・參考文獻・索引・圖版出典一覽

各章ごとの記述に偏りはなくバランスがとれており、「付錄」も充實している。窪著が出版されて以後四〇年を越す間の道教の各領域に於ける專門研究の成果が十二分に踏まえられた内容と言える。

まず序章で述べられる「道家」「道教」概念の整理は重要であろう。これら概念が様々な問題を孕むものであ

ることは道教研究に慣れる者には周知のことだろうが、しかし、一般讀者には「思想・哲學が道家、宗教が道教」或いは「中國人は建前では儒教、本音では道教」等と理解されているのではないだろうか。これに對し筆者は、中國の傳統的文獻では兩者が指す內容には基本的に區別はなかったが（「道家」の語が雙方を意味していた）、十九世紀後半以降の「宗教（religion）」概念の西來を經て、道教を宗教・道家を哲學とする區分が定着した。從って、傳統的中國の「道教」と近代以降に廣く用いられる樣になった「道教」とは必ずしも一致していないと整理する。一般讀者に對してはここまででもかなり啓蒙的であろう。「しかし」と筆者は言い、文獻の用語例を通覽吟味してその意味を歸納するという作業を常とする中國古典學研究者にとり、この兩「道教」の乖離はさしたる障害とはならないと言う。卽ち、大枠を前提とすることなく、文獻の記述に卽して實證的に讀み込む姿勢が古典研究の基軸となるべきことを言うものである。從って、時代により、對象とする資料により、「道教」の枠組みは樣々に異なることになり、第3章の佛教の僞經、第5章の僧侶の老莊釋文や會道門など、道教の通念からは些か外れるものも本著が廣く取り込んでいるのは、こうした理解を背景に持つものと思われる。序章の記述だけでも本著の價値は有ると思われる。

さて、道教の通史となれば、時間軸に沿った文獻・人物・道派・思想・社會との關わり等に關する記述が讀者の求める所であろうか。

一般讀者を想定しているとなれば、過度な文獻考證は控えるべき所ではあろうが、本著は文獻書誌には細心の注意を拂っている。例えば、第2・3章に亙る「三皇經・靈寶經・上淸經の形成」と「三洞四輔說」は、この數十年間で最も文獻研究の進展した領域の一つと言えるが、筆者はそれぞれの經典群の成立經緯と撰述母體について、僅かな頁で要領よく整理している。「三皇經」は依然明確にし得ない點も多いが、文獻を巡る狀況を簡潔に整理し、「靈寶經」は思想內容にも言及しつつ、撰述母體と經典の系統について纏め、「上淸經」については

上清派の主要人物を紹介しつつ、『大洞眞經』を軸にその性質を端的に紹介している。

その一方で、多くの先行研究を踏まえても尚、明白にし得ない事項の扱いには慎重である。例えば第2章の魏晉に於ける「玄學」流行の理由に就いては、武内義雄・森三樹三郎・戸川芳郎等の諸説を援用しながらも斷定的表現を避け、第3章の『老子化胡經』の撰者に就いては、道教側撰と佛教側撰の二説を並置するに留めている。

道派はその理解が複雑であり、日本と中國とでは理解の枠組み自體にも違いがある。本著では、太平道・五斗米道（後漢）、天師道（南北朝以降）、帛家道・李家道（南北朝）、上清派・靈寶派（六朝以降）、全眞教・太一教・大道教（金末以降）、淨明道・天心法・神霄派・清微派（宋以降）、龍門派（明以降）、全眞諸派等の重要かつ概ね共通認識を得られている道派をそれぞれの發生時期に應じて記述している。樓觀派の記述をコラムに讓っているのは筆者の見識の現れであろうか。

思想の面で最も紙幅を費やしているのが第3章の「4思想と道術の發展」である。道教史上その思想面が最も深化したのは唐代であり、それは佛教・儒教思想との交流を背景に持つ。その象徴的例の一つが「道性」思想の誕生であり、本著は佛教の「佛性」思想と道教の「道性」の類似性、『莊子』を踏まえた道教の「道性」の獨自性等を丁寧に記述している。また、この「道性」と深く關わる「重玄」の思想もこの時期を代表する概念であり、その説明も充分且つ丁寧である。

道教の道術に關しては金丹と內丹の歴史について詳細に述べられている。金丹に就いては『抱朴子』系の「金砂派」、『周易參同契』系の「鉛汞派」という、中國の研究者の觀點を用いつつ整理する。一方、氣を體內に取り入れ巡らす術としての「服氣・行氣・胎息」等は本來別々の道術であったが唐代頃には一體化し、その後、胎息法が重視され、それが內丹と呼ばれる場合が生じ、そして、金丹術の鉛汞理論が流行し、その用語が內丹術に轉用されるようになったと整理している。內丹に關する諸情報が網羅的に紹介されているが、その經緯の説明は

些か専門的で錯綜している。尙、「外丹」の語にここで言及していないのは何故であろうか。こうして形成された內丹が宋代以降の新しい內丹術へと展開していく。『鍾呂傳道集』『靈寶畢法』『西山群仙會眞記』等に集約される鍾呂系の內丹法、そして、南宋・白玉蟾の提唱による北宋・張伯端を開祖とする南宗と、全眞教・王喆を淵源とする北宗である。但し、この南北宗の說明も、張伯端を繼承するとされる石泰・薛式の系譜には未確認部分が殘ることを指摘し、南宗（派）・北宗（派）という整理區分が定着するのは明初頃よりであるとの事實確認も怠っていない。內丹法がその後一般文人へと廣がって行った展開については明代の頁に詳しく紹介されている。

道教と社會との關わりについても多く記述されている。道教管理制度に係る問題は近年の中國の研究で重視されている領域だが、本著でも各時代に於いて頁を割いて「道官・道觀・道擧制度」として整理されている。六朝～唐代は、こうした制度の誕生期に相當するため、その歷史經緯を說明し、特に唐代の科擧試驗特有の「道擧」（『老子』による出題）について丁寧に記述している。宋代は一般の官職制度も複雜だが、宋代の道教の位階は、傳統的な位階制に當事者の關わった道法の位階が交わり複雜化し、南宋に到ると位階の併用が見られる樣になるという記述は、實體に卽した記述と言えよう。明淸の道教制度も整理の上述べられている。また、龍虎山（天師道）・茅山（上淸派）・閣皂山（靈寶派）の三山が各々獨自のシステムで符籙を發行出來たという所謂「三山符籙」は筆者が專門とする所だが、道士の資格と階位がシステマチックに管理されていた具體例の一つと言える。唐代以降の道教がこうした制度を介して社會と深く關わっていたという記述は、「道教」＝「無爲自然を揭げて隱遁する宗教」という一般讀者の認識を新たにするものであろう。各時代の考證としては、明・淸・民國時代も充實しており、諸道流の動態の說明は具體的且つ詳細である。

中國史上、道教が何時から存在していたのかに就いては、道教理解の枠組みが關係し定見がない。中國では日

本とは異なる觀點も有り、より早期の發生を主張する研究者もいる。本著が道教の誕生時期を明確に言うことはないが、「道教的」要素がより早い時期に存在していた可能性についての指摘は見られる。例えば、前漢・李少君の祠竈術が鍊丹術の濫觴である可能性、後漢の出土資料「解注文」に原始的な符籙が見られること、秦代の出土資料「日書」に禹步の記錄が見られること等が指摘されており、これらは後に道教の一部となるであろう要素がより早い段階で存在していたことを意味するものであり、興味深い指摘と言える。漢代の「老子銘」の個所で身體論的解釋の文脈で「黃庭」に說き及ぶのもその一例であろう。

その他、一般に「老莊」と通稱されることが多いが、兩者が結びつく事例は前漢『淮南子』が初出であること、後漢頃には老子は既に神仙的存在となっていたこと、三洞四輔による道教經典の整理後も全面的統合化が必ずしも進んでいた譯ではないこと、スタンダードな金丹南宗の他にも別の傳承があったこと、等は見逃しがちなコメントではあるが、重要な指摘と言えよう。

本著は山川出版社企畫の「宗教の世界史」シリーズの一冊であることから、一般讀者をも想定した內容と當然推測されるが、專門著書としても十分に讀み應えのある一冊である。「さまざまな考え方の人にも利用していただける汎用性」（二十一頁）を配慮したという記述に筆者自身の方針を窺うことが出來る。その分、清朝末期の道書の刊行狀況を紹介した箇所等は文獻名がほぼ一頁に亙って列擧されており、一般讀者にはやや辛いかもしれない。卷末に紹介する參考文獻の大半は專門研究者が日頃參考とする類の文獻であり、本著はその成果が十分に踏まえられている。これから道教研究を志す學部生等が最初に手に取る一書としては最適と言えよう。自分が學部生の頃に本著が刊行されていなかったことを悔しく思うばかりである。

（四六版、三五〇頁、二〇一五年四月、山川出版社、三五〇〇圓（稅別））